学園ルシファーでの出来事

厨房

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園ルシファーでの出来事

【Nコード】

N8695N

【作者名】

厨房

【あらすじ】

超難関中学校と同時に完全学寮制をとっている学園として有名な学園ルシファーに入学した竜善際須は、この学園の実態を知ってしまった

入学したら 二つなつた

終わる事の無いと思っていた冬休みが終わって、辺りは桃色の幻想的な世界へと変貌していた。俺包み込んでいる桜並木から桃色の雪が舞い降りてくる。この桜並木の先に建っている学園ルシファー、この学園は偏差値140で倍率は200を超える超難関中学校で有名なのと同時に完全学寮制をとっている数少ない中学校としても有名だ。そしてこの学園に入学した俺の名は、竜善際須。キーンコーンカーンコーン 聞き覚えのある響きが耳に響いた。「やべっ、急がなきゃ！」そう心の中で呟き、桜並木の中を猛ダッシュで走り出した。

「はあはあはあ 何とか間に合つたみたいだな」また心の中で呟き席についた。さつきまで焦っていて気づかなかつたがこの講堂はかなり広がった。別の物で例えるならば映画館が一番合っているだろう。それからしばらく建つてこれはまた広大な舞台の上に校長が歩いてきた。「何か梅干みみたいだな」心の中でクスクス笑っていた。そして校長の話が始まった。「皆さんこんにちは」誰も返事をしない。だが校長は話を続ける。「この学園は世界から見ても飛びぬけて頭の良い学園だ、この学園に入学した君達はこれからの日本を担う人間に育ってもらいたい」と言うのは世間への出任せだ。「え？」と際須は思った。際須に限らずこの講堂の進入生全員が思ったことだろう。刹那で会場がハテナで埋め尽くされた。だが校長は話を続ける。「この学園は政府の経営する、学園型研究施設なのだ、そこで君達にはこのカプセルを飲んでもらいたい」校長はカプセルをちらつかせた。そうすると教員からカプセルが配られた。いきなりそんな事を言われても飲める人がいるのだろうか？もし飲んだ奴が居たならばソイツを勇者と呼ぶと同時に馬鹿と呼ぶだろう、と際須は思った。ゴクリ 「早っ！飲んじゃったよ！飲んじまったよ！隣の奴がいきなり飲んじやったよ！こいつには警戒心というものが無い

のか？コイツは勇者だ！いや、馬鹿だ、勇者でもなんでもない、馬鹿だ！」そうコイツに言いたくてしょうがなかった。そんな事を考えていると、講堂に叫び声が響いた。「うああああああああ」音源は隣のコイツだ。「大丈夫か？」と際須は聞いた。「凄いぞ」「何て言っただ？」「コイツの声があまりにも小さかったために聞き取れなかった。「凄いぞこの薬！」そう言うとソイツはシャーペンシルを赤い絨毯に落とした。そしてそのシャーペンに手を向けた。コトン、という音と同時にそのシャーペンが宙に浮かび上がったように見えた。際須は目を擦ってシャーペンを見た。シャーペンは宙に浮かんだままだ。もう一回目を擦ってシャーペンを見たが宙に浮かんだままだ」際須の心の中は警戒心と好奇心が混ざり合っていた。ゴクリ 好奇心が警戒心を打ち負かした瞬間だった。「うああああああああああああああああああ」

激しい頭痛と眩暈が際須を襲った。その痛みは気が遠くなるほどの痛みだった。しばらくしてそれらが収まった。左手がやけに重い。そして左手を見ると左手には、蒼い剣が握られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8695n/>

学園ルシファーでの出来事

2010年10月10日00時25分発行